



# 飼料

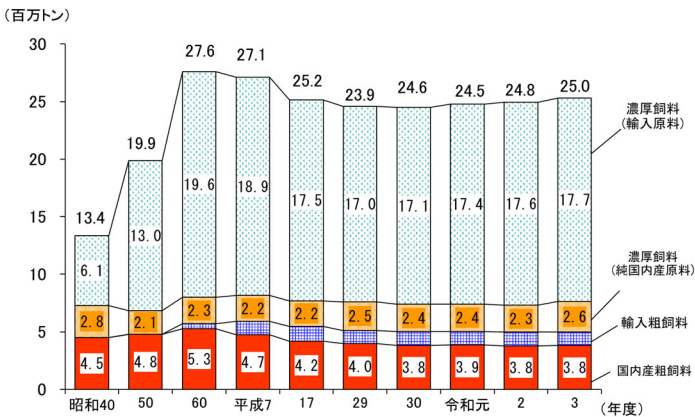
## ◆飼料需要量の推移

3年度の飼料自給率は、前年度と変わらず25%

飼料の需要量は、近年は2500万トン（TDNベース）程度で推移している（図1）。

令和3年度（概算）は、2529万9000トン（前年度比1.5%増）となった。

図1 飼料需要量（TDNベース）の推移



資料：農林水産省「食料需給表」

注1：TDN（可消化養分総量）とは、家畜が消化できる養分のエネルギー含量を示す単位であり、飼料の実量とは異なる。

注2：濃厚飼料「純国内産原料」とは、国内産に由来する濃厚飼料（国内産飼料用小麦・大麦など）である。濃厚飼料「輸入原料」には、輸入食料原料から発生した副産物（輸入大豆から搾油した後発する大豆油かすなど）も含む。

注3：昭和59年度までの輸入は、すべて濃厚飼料とみなしている。

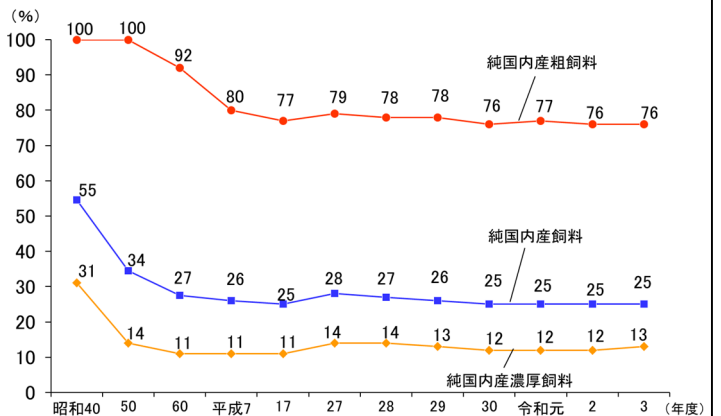
注4：令和3年度は概算値。

飼料の自給率を見ると、3年度（概算）の純国内産飼料自給率〔純国内産粗飼料供給量＋純国内産濃厚飼料供給量〕/総需要量は、前年度と変わらず25%となった（図2）。

また、純国内産粗飼料自給率は、飼料作物の作付面積が横ばいで推移したことに加え、夏季の少雨の天候の影響などがあつたものの単収も前年同であったことから前年同の76%となった。

純国内産濃厚飼料自給率は、前年度比1ポイント増の13%となった。

図2 飼料自給率の推移



資料：農林水産省「食料需給表」

注1：昭和59年度までの輸入は、すべて濃厚飼料とみなしている。

注2：令和2年度は概算値。

## ◆飼料作物の生産

収穫量は、前年比6.3%増

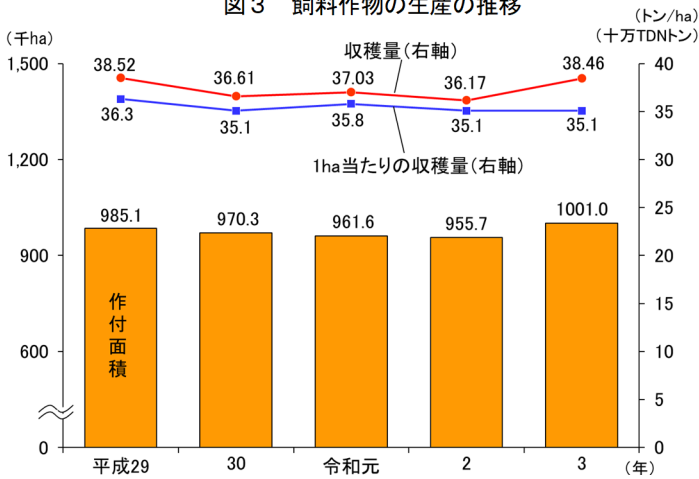
飼料作物の作付面積は、長らく畜産農家戸数や飼養頭数の減少に加え、農家の高齢化による労働力不足などに伴い微減傾向で推移していた。しかし、平成22年以降は、稲発酵粗飼料および飼料用米の作付けが拡大した結果、増加傾向で推移した。

令和3年（概算）は、飼料用米の作付面積の増加などにより、100万1000ヘクタール（前年比4.7

%増）となった（図3）。

また、飼料作物の収穫量（TDNベース）は、平成29年ごろまでは稲発酵粗飼料や飼料用米の作付け拡大により増加傾向であるが、近年は横ばいで推移している。令和3年は、384万6000トン（同6.3%増）と、前年を上回った。

図3 飼料作物の生産の推移

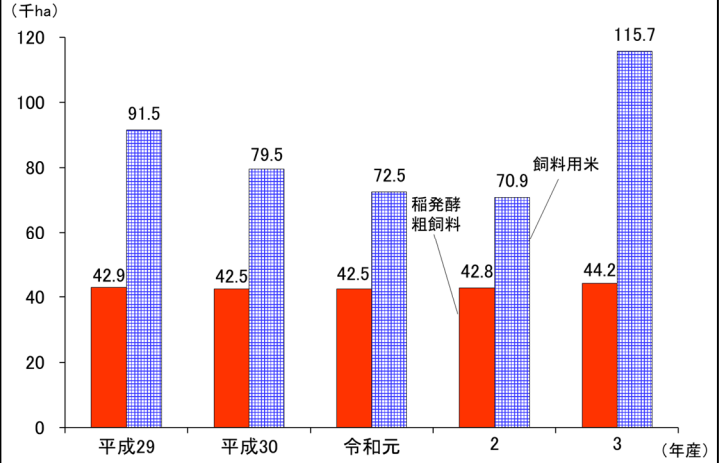


資料：農林水産省「耕地及び作付面積統計」、「飼料をめぐる情勢」

稲発酵粗飼料の作付面積は、近年増加傾向で推移しており、3年産は、前年産から1457ヘクタール増加し、4万4248ヘクタール（同3.4%増）となった（図4）。

また、飼料用米の作付面積も増加傾向で推移しており、3年産は、前年産から4万4861ヘクタール増加し、11万5744ヘクタール（同63.3%増）となった。

図4 稲発酵粗飼料および飼料用米の作付面積の推移



資料：農林水産省「飼料をめぐる情勢」

## ◆粗飼料の輸入

### 3年度の輸入量、乾牧草は増加、ヘイキューブは減少

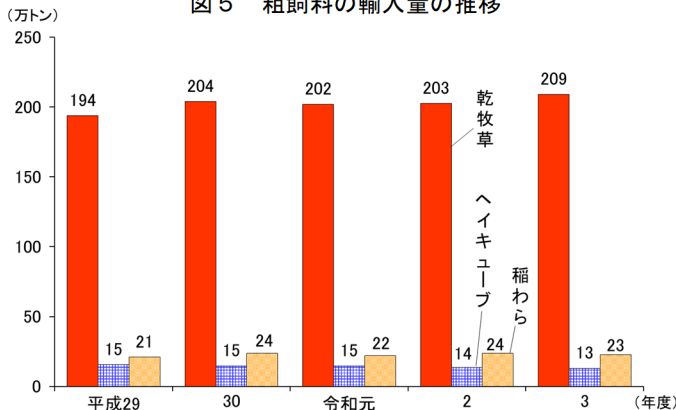
乾牧草の輸入量は、平成29年度は前年度の日本国内の天候不順による乾牧草の供給不足などにより、輸入乾牧草の需要が高まり193万8067トン（前年度比3.8%増）となった（図5）。30年度も北海道における長雨の影響などにより引き続き乾牧草の供給が不足したことから、203万9406トン（同5.2%増）となった。令和元年度も前年の北海道の天候不良の影響に加え、東北における天候不良などの影響を受け国内供給が不足したことから、202万1068トン（同0.9%減）となった。3年度は、前年度から続く国際的な海上コンテナ輸送の

混乱などにより不安定な供給状況が生じたものの、209万1383トン（同3.2%増）となった。

また、ヘイキューブの輸入量は、近年微減傾向で推移しており、3年度は13万157トン（同4.3%減）となった。

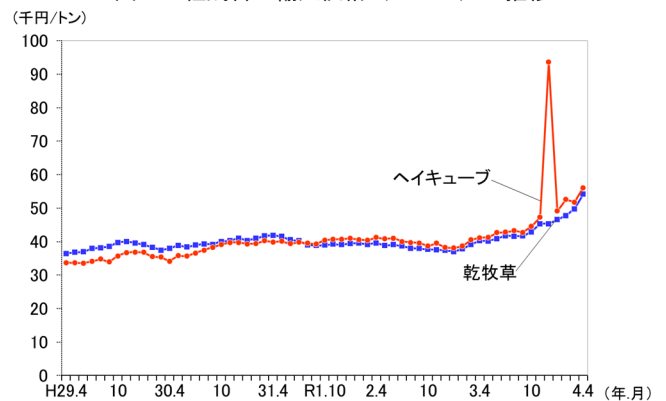
乾牧草およびヘイキューブの輸入価格（CIF）は、近年、主産地における国内需要や新興国などの需要が堅調である中、天候や為替により変動している。3年度は、為替が円安に推移した影響やコンテナ輸送費の上昇などにより、乾牧草、ヘイキューブともに前年度を上回った（図6）。

図5 粗飼料の輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」  
注：稲わらは、中国から輸入された穀物のわらである。

図6 粗飼料の輸入価格（CIF）の推移



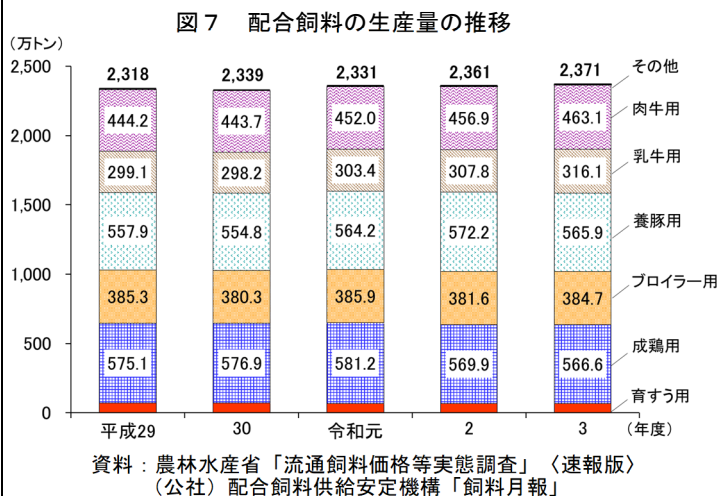
資料：財務省「貿易統計」

## ◆ 配合飼料の生産

### 3年度の生産量は微増

配合飼料の生産量は、昭和63年度をピークに家畜飼養頭羽数の減少に伴って緩やかに減少していたが、近年は横ばいで推移しており、令和3年度は2370万6830トン（前年度比0.4%増）となった（図7）。

畜種別で見ると、養鶏用が1019万6250トン（同0.1%増）、うち成鶏用が566万5786トン（同0.6%減）、ブロイラー用が384万7283トン（同0.8%増）、養豚用は565万9304トン（同1.1%減）、乳牛用は316万1109トン（同2.7%増）、肉牛用は463万678トン（同1.4%増）となった。



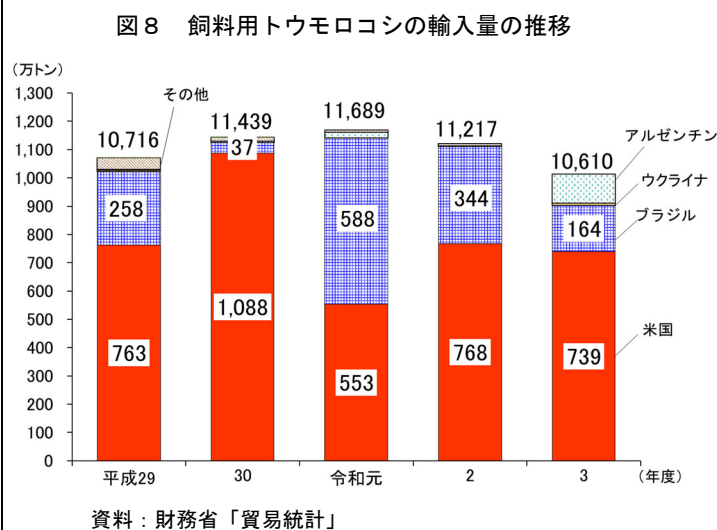
## ◆ 飼料用トウモロコシの輸入

### 3年度の輸入量は、アルゼンチン産が増加

配合飼料の原料穀物（トウモロコシ、こうりゃん、大麦、小麦など）のほとんどは輸入に依存しており、輸入量の8割以上をトウモロコシが占める。

トウモロコシの輸入量は、平成29年度以降増加傾向で推移していたが、令和3年度は1060万9805トン（前年度比5.4%減）となった（図8）。

輸入先別に見ると、3年度はアルゼンチン産のシェアが拡大し、102万7557トン（同107倍）と大幅に増加した。一方、ブラジル産は天候不順により163万8364トン（同52.4%減）と大幅に減少した。



## ◆ 配合飼料価格

### 2年度の配合飼料工場渡し価格は、0.2%上昇

配合飼料価格は、飼料穀物の国際相場、海上運賃、為替相場などの動向を反映する。令和3年度の工場渡し価格は、1トン当たり7万3172円（前年度比19.1%高）となった（図9）。

畜産経営では、生産費に占める配合飼料費の割合が高い。このため、配合飼料価格の上昇が畜産経営に及ぼす影響を緩和する措置として、民間の自主的な積み

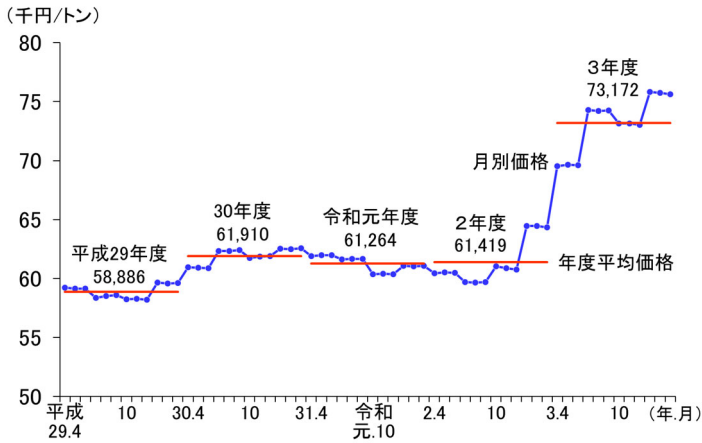
立てによる通常補填制度と、通常補填で対処し得ない価格高騰に対応するため、国の支援による異常補填制度が導入されている。

近年は、28年秋以降、円安の影響や海上運賃の上昇などにより輸入原料価格が高騰したことから、28年度第4四半期以降、3期連続で発動した。

30年1月以降、シカゴ相場が一時的に上昇したこ

とや、海上運賃上昇の影響などを受け、輸入原料価格が上昇したことから、30年度は通常補填が4期連続で発動した(表)。また、中国の需要増加などを背景にシカゴ相場が上昇したことから、令和2年度第4四半期は8期ぶりに通常補填が発動した。3年度第1四半期は通常補填が発動するとともに、16期ぶりに異常補填が発動し、続く第2～第4四半期も通常・異常補填とともに発動した。

図9 配合飼料の価格動向の推移



資料：農林水産省「流通飼料価格等実態調査」＜速報版＞および  
 (公社) 配合飼料供給安定機構「飼料月報」  
 注：全畜種加重平均の配合飼料工場渡し価格。

表 配合飼料の価格(建値)改定および補填状況

(単位:円/トン)

適用期間	価格改定額 (対前期差)	補填単価			
		通常	異常		
平成29年度	第1四半期	+ 700	1,700	1,700	-
	2四半期	▲ 1,100	400	400	-
	3四半期	▲ 400	-	-	-
	4四半期	+ 1,500	-	-	-
30年度	第1四半期	+ 1,100	300	300	-
	2四半期	+ 1,550	3,450	3,450	-
	3四半期	▲ 800	2,300	2,300	-
	4四半期	+ 500	300	300	-
令和元年度	第1四半期	▲ 850	-	-	-
	2四半期	▲ 400	-	-	-
	3四半期	▲ 650	-	-	-
	4四半期	+ 700	-	-	-
2年度	第1四半期	▲ 800	-	-	-
	2四半期	▲ 1,000	-	-	-
	3四半期	+ 1,350	-	-	-
	4四半期	+ 3,900	3,300	3,300	-
3年度	第1四半期	+ 6,600	9,900	3,999	5,901
	2四半期	+ 2,300	12,200	4,934	7,266
	3四半期	▲ 3,700	8,500	4,372	4,128
	4四半期	▲ 3,300	5,200	3,451	1,749

資料：全国農業協同組合連合会（JA全農）、農林水産省  
 注：価格改定額はJA全農の全国全畜種総平均。